

〔書評〕

リー・マッキンタイア著、大橋完太郎監訳、居村匠・大崎智史・西橋卓也訳、2020 年、
『ポストトゥルース』人文書院。

松村 一志

「ポストトゥルース」は、現代社会を語る上で最も便利なキーワードの一つだろう。現代では、「フェイクニュース」や「陰謀論」といった誤情報が広く流通しており、その一部はあからさまなデマである。こうした状況を目にすると、かくも露骨な虚偽が流布してしまうのはなぜなのかと問いたくなる。「ポストトゥルース」という言葉は、その不可解さをうまく表現している。

だが、「現代はポストトゥルースの時代だ」と言うだけでは、何かを言ったことにはならない。「ポストトゥルース」という現状認識を受け入れるならば、この言葉で漠然と指し示される現象が正確には何であり、その背後にいかなるメカニズムがあるのかを見定めることが必要になる。リー・マッキンタイアが本書で行うのは、まさにそうした作業である。もちろん、「ポストトゥルース」が何よりもまず流行語である以上、それを研究の出発点にすることには危険も伴う。しかし、著者はそうした危険を十分に意識し、慎重に（かつ小気味よく）議論を進めている。

「ポストトゥルース」をめぐって最初に考えなければならないのは、それが本当に現代に固有の問題なのかという点である。20 世紀のプロパガンダを考えれば分かる通り、誤情報が広がること自体は稀ではない。そこで本書は、「ポストトゥルース」の特徴を、「真実」が存在するという考え方の否定にではなく、むしろ、政治的優位を主張するための手段として「真実」が否定される状況に見出している（本書 12-13 頁）。すなわち、「真実」よりも重要な何かを擁護しようとするのが、「ポストトゥルース」だと言う（30 頁）。

では、この問題と対峙するにはどうすれば良いのか。その第一歩は、「ポストトゥルース」が発生した経緯を理解することである（31 頁）。本書は、その経緯を「科学否定論」「認知バイアス」「メディア」「ポストモダニズム」の四つの側面から論じている。

マッキンタイアはまず、「ポストトゥルース」の前兆を「科学否定論」に見出している。「科学否定論」とは、科学者の動機や技量を疑うことで科学の成果を拒絶する動きだが（36 頁）、そこでは「タバコ戦略」と呼ばれる手法が使われてきたことが知られている。タバコ業界は、喫煙と癌の因果関係を否定するために、専門家に資金を提供し、業界に有利な研究を進めさせることで、喫煙の有毒性が意見の分かれる問題であるとの印象を世間に植え付けることに成功した。この手法が、タバコ業界を超えてさらに、戦略的防衛構想・核の冬・酸性雨・オゾンホール・地球温暖化といった事柄にも応用されてきたのである（44-45 頁）。マッキンタイアは、この手法をもって現実そのものを標的にしたのが「ポストトゥルース」だと考えている（55 頁）。

とはいえ、「ポストトゥルース」の背景にあるのはこれだけではない。より深いルーツとして「認知バイアス」がある。社会心理学の古典では、「認知的不協和」「社会的圧力」「確証バイアス」のように、人々が思いのほか合理的でないことが知られている（57・65頁）。最近ではさらに、「バックファイアー効果」「ダニング＝クルーガー効果」のように、真実であってほしいという願いが真実の認識に影響を及ぼす「動機づけられた推論」の存在も指摘されている（67頁）。こうした「認知バイアス」は、人類の進化の歴史に根ざしており、リベラルであれ保守派であれ、避けられないものである（80頁）。もちろん、他人の反対意見に触れることによって改善される可能性はあるが、今日のインターネットでは、好ましくない意見を遠ざける「ニュース・サイロ」（≡フィルター・バブル）によって、この可能性が奪われやすい（82-84頁）。

では、メディアの変化は「ポストトゥルース」とどう関わるのか。マッキンタイアはまず、アメリカにおける伝統的メディアの凋落に注目している。その重要な契機の一つが、1996年のケーブルテレビの登場である。ケーブルテレビが党派性の高いニュース番組を放送し始めたことで、一流紙・ネットワークテレビ・CNNといった伝統的メディアは、以前にも増して「客観性」を重視するようになった（104-105頁）。ところが、その結果、伝統的メディアはいかなる問題にも両論併記を行うようになった。こうした手法は、定説がはっきりしている問題にまで意見対立が存在するかのように見せる「偽の等価性」をもたらしてしまう（106頁）。

伝統的メディアの凋落と反対に台頭してきたのがソーシャルメディアである。ソーシャルメディアの登場は、ニュースと意見の境界線を曖昧にした（125頁）。そのため、どの記事が信用できるのか、どれが十分な精査を経ているのかを判断することが極端に難しくなる（128頁）。こうした「フェイクニュース」の問題は、最近になって初めて現れたものではなく、活版印刷の発明と同時に生まれたものである（128-129頁）。「ニュース」が「客観性」を持つべきだとする考えは、19世紀末以降に形成された新たな規範にすぎないが、そうした規範が当たり前のものになったことで、人々は怠惰になり、批判的思考を失ってしまった（134-137頁）。

これに加え、「ポストトゥルース」のもう一つの起源として「ポストモダニズム」が挙げられている。マッキンタイアの見るところ、「ポストモダニズム」は、(1)客観的真理なるものは存在しない、(2)どんな真理の宣言もそれを行う人物のイデオロギーにすぎない、という主張からなっている（164頁）。この考え方が自然科学に向けられたのが「社会構築主義」であり（166-167頁）、それが右派による科学の否定に利用されるようになった（173-174頁）。

それでは、「ポストトゥルース」に対して何ができるのか。マッキンタイアは、二つの提案を行なっている。一つは、自らの持つ「認知バイアス」に気づいて、それを覆すよう努めることであり、もう一つは、よりよいニュースメディアの形を模索することである（217頁）。

以上が本書の概要である。本書の美点は、「ポストトゥルース」の発生の経緯を多面的に（しかし無理なく）説明していることにある。「ポストトゥルース」の説明はややもすると一つの側面に偏りかねないが、本書は複数の観点をバランスよく取り上げつつも、全体として一つの説明になっており、学ぶところが多かった。

ただし、本書の説明の有効性を認めた上で、なお一つ疑問が生じた。それは、本書の前提となる「ポストトゥルース」という現状認識それ自体は妥当なのかという問題である。現代社会をめぐるのは、しばしば近代的な秩序の「解体」のイメージが過度に強調されてきたが、「ポストトゥルース」もそうした（よくある）語り口の一種なのではないかとの疑いを持った。

「ポストトゥルース」という言葉は、「真実」を気にかけない人々の存在を問題視するものだが、それが流行語になった以上、「真実」を気にかける人々もそれだけ多く存在していることになる。そもそも「ポストトゥルース」と認定される側もまた、しばしば自らが「真実」の側にいると主張している。例えば、コロナ禍では、インターネット上で「ワクチンの真実」という類の「陰謀論」が広がっていることが問題視された。だとするならば、「ポストトゥルース」という言葉とは裏腹に、現代社会は以前にも増して「真実」が気にかけられる社会になっており、だからこそ、「真実」を判定する基準のズレが強烈に意識されるのだとも考えられる。本書はもっぱら「ポストトゥルース」として批判される側だけを分析しているが、批判される側とそれを批判する側とは同じコインの表と裏だと見た方が良い。

以上のように考えると、「ポストトゥルース」という言葉の出現に、これまで以上に「真実」を重視するようになった社会の成立を読み取ることもできるだろう。一般的な理解とは反対のこうした出発点を設定することで、現代社会を「ポストトゥルース」の時代ではなく、むしろ、「真実」の時代として描き出す方向性もありうる。実際、現代は「陰謀論」が広がると同時に「エビデンス」が求められる時代でもある。

このように、さらなる検討の余地はあるものの、本書が「ポストトゥルース」についてのスタンダードな説明を示すものであることは間違いない。著者と同じように考えるにせよ、別の方向性を模索するにせよ、本書は現代社会を考えるための重要な手がかりを提供してくれるだろう。